

旅

の面白さは曲者との出会いにある」と、この連載の初めに書いた。といつても、ここでいう曲者とは、いわば異文化や他者にふれるときに違和感を訴えてくる様々な事柄という意味だ。

曲者との出会いは、それまで自分が当たり前だと思っていた常識や思いこみが揺さぶりを受ける瞬間でもある。それは常識にとらわれた自分の感性をやわらかくしてやるためのチャンスでもある。

では、自分の旅で出会った様々な曲者の中でも、最も手強かったものは何か。もしそう問われたとすれば、真っ先に思い出すのは中央アフリカの

のコンゴ川で乗ったある奇妙な船のことである。

アフリカを旅する白人バックパッカーの間でも、その「船」の噂はしばしば囁かれていた。それによると、船はコンゴ河下流の首都キンシャサと、その1700キロ上流の密林の町をむすぶ定期船らしい。しかし、噂は聞いても、この船に実際に乗った者には会わなかった。定期船とは名ばかりで、スケジュールもなければ、片道3週間から1カ月かかるため、滅多にお目にかかれぬ幻の船と

旅の曲者

終

最強の曲者

文・写真／田中真知 Tanaka Mochi

イラスト／bozen

化していたのである。だから、たまにたまにコンゴ川の上流にさしかかったとき、その船の入港に出会えたのは運がよかった。しかし、初めて船を目にしたときには、本当にそれが幸運だったのかどうか大いに悩んだ。それほど想像を絶する船だったのだ。

第一、それは船の形をしていなかった。正確には1隻の船ではなく、6隻の船をいかだのようにワイヤーでつないだ全長200メートルほどの巨大な船の複合体であった。船の体裁をたもっているのは動力船だけ

りにはヤギやニワトリやサルなど生きた動物が数十匹という単位でひもでつながれている。トイレに行くとき、勝手にワニとブタがつながれていた。

これが定期船だって？ いわゆる旅客船をイメージしていたばかりはすっかり混乱してしまった。やがて、船は出航した。船というより、まるでスラムが川に漂いだしたかのようだった。

やがて、わかってきたのは、この船は陸上交通のないコンゴ川で、村

で、前の5隻は船というより朽ちかけた筏である。

さらに目を引くのは、そこに乗っている人の数だった。甲板や通路はおろか屋上も黒山の人で埋まり、隙間にはキャツサバの袋、真っ黒な魚の燻製、バナナの房などがびっしり積みまわっている。

中に足を踏み入れると、さらにすごい。通路には洗濯物がはためき、隙間なく露店が並び、米や砂糖からラジオや医薬品にいたる、あらゆる物資が床を埋めつくしている。手す

船が流域の村のそばを通過すると、面白いことが起きる。何十艘という丸木舟が岸辺からいつせいに漕ぎ寄せてくるのである。原住民の襲撃かと思いきや、彼らはジャングルで獲れたさまざまな動物、魚、キャツサバなどを、船に売りに来るのだった。

とはいえ、疾走する大型船に丸木舟を横付けするのは容易ではない。中には波を受けて転覆して、積んでいた生きたブタやシカごと流されてしまう丸木船もある。冗談のような命がけの光景である。

無事船に横付けできた丸木舟からは、森で獲れた獲物が船内に運び込まれる。サル、チンパンジー、ノブタ、ワニ、アンテロープ、ダイカー、ヤマアラシ、カワウソ、オオネズミ、リクガメ、コウモリ、オオナマズ、ヘビ、カゴに盛られたイモムシ、それに主食のキャツサバやバナナなど、おびただしい種類の農産物や野生動物である。続いて村人と住み込み商人のあいだで活発な交渉が始まる。

商人は、これらの獲物を首都で高く売るために村人から買い取る。一方、村人は獲物を売ったお金で船内に売っている衣類や薬、砂糖や塩、漁に必要な釣り針や網など、村では手に入らないものを仕入れる。



密林の村から定期船めがけて漕ぎ寄せてくる丸木船。定期船の到来は流域の村にとってお祭り騒ぎである。

インフレ率が1万パーセント(当時)という経済状態のため、この国では現金は瞬く間に紙切れ同然になる。そのため現金を得た村人たちは、その金をすべて船内で使いきる。船内にはわか成金となった村人のおかげで、一種のバブルのような雰囲気になる。

船内にはバーやディスコ、それに教会もある。2000人以上の乗客が1カ月も旅をすれば途中で病気や事故で死ぬ人もいるため、葬式やミサも執り行われる。その反対に船内で赤ん坊が生まれることもある。夜になれば何十人という泥棒団が乗客の荷物を狙って暗躍する。それを迎え撃つ警ら隊もいる。流域住民にとって、この船は、月に1度やってくる移動するマーケットであり、娯楽の場であり、病院であり、教会であり、何より人生そのものを丸抱えした祝祭の場なのであった。

夜、屋上に座って川を眺めていると、暗い河の水面におびただしい空の星明かりが映っていた。天と地の2つの星空の間に挟まれて、船は闇

の中をゆつくりと進んでいく。船内では相変わらず、昼間と変わらぬ祭りのような狂騒が繰り広げられている。しかし、船の外側には見渡す限り、漆黒の闇が密林の奥深くまで続いていた。それはまるで広大な宇宙の辺境にぼつりと浮かぶ地球の縮図のようだった。

この無辺の闇と沈黙のただなかにあって、人の営みはいかにもちっほけで滑稽な営みが、このときは愛おしくてならなかった。明日には紙切れになる金を必死で使いまくる人たち、ブタと一緒に流されてしまった漁師、トイレにつながれていたワニ、イモムシをほおばる子供たち、船内の教会に鳴り響く死者のためのミサ、むち打たれる泥棒たちの雄叫び。いっさいがバカバカしいようで、いっさいが哀しく愛おしい。おそらく、あらゆる人間の営為とはそういうものなのだ。さまざまな感情がない交ぜになり、それは腹の奥からこみ上げてくる笑いとなってアフリカの闇の中へと広がっていった。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語(北東部編・中南部編)」「凱風社」、『ある夜、ピラミッドで』(旅行人)、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』(凱風社)、『惑星の暗号』(翔泳社)など。